慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	タフ・ヴェイル判決とイギリス鉄道労働運動(IV)
Sub Title	The Taff Vale case and railway trade unionism in Britain (IV)
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.4 (1990. 1) ,p.792(124)- 818(150)
JaLC DOI	10.14991/001.19900101-0124
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900101-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」82巻4号（1990年1月）

タフ・ヴェイル判決とイギリス鉄道労働運動(IV)

松　村　高　夫

目　　次

Ⅰ　タフ・ヴェイル鉄道労働者のストライキ以後の運動（1900年9月―）
1　ストライキ締結条件不履行をめぐる闘争――「スト破り」排除と調停委員会設置の要求
2　「ビーズリー書簡」に関する T.V.R. と A.S.R.S. の対立的見解の表明（1901年1月）
Ⅱ　タフ・ヴェイル鉄道労働者運動の内包する諸矛盾
1　A.S.R.S. 本部とタフ・ヴェイル闘争委員会の不一致の再現
2　炭鉱労働者等との共闘の可能性
3　A.S.R.S. 本部による闘争中止の決定（1901年6月）
Ⅲ　「ビーズリー書簡」をめぐる A.S.R.S. 本部とタフ・ヴェイル闘争委員会
――A. マーチの尋問（1901年6月）

Ⅰ　タフ・ヴェイル鉄道労働者のストライキ以後の運動（1900年9月―）

1　ストライキ締結条件不履行をめぐる闘争
――「スト破り」排除と調停委員会設置の要求

本稿ではストライキ終結後，1900年9月から1901年6月までの，タフ・ヴェイル鉄道労働者の運動の展開とそれが抱える諸問題を解明する。

南ウェールズのタフ・ヴェイル鉄道のストライキは，12日間続いて，1900年8月31日に終った。(1) 労使間の締結条件は4点，すなわち，第1に，タフ・ヴェイル鉄道会社 T.V.R. は，1カ月以内にストライキ参加者全員を復帰させること，第2に，信号手エウィントンの配転問題の調停を商務院 Board of Trade に委任すること，第3に，ストライキ参加者の年金等の権利を保障すること，第4に，ストライキ参加者に対する訴訟をとり下げること，であった。この締結条件は組合にとって最低限の防衛的なものであった。ストライキ発火の直接的契機となったエウィントンの配置転換問題を，労使間の交渉で決着せずに，商務院に委任しただけではない。(2) 就業した190名の「スト破り」を1週間以内に排除すること（8月29日の闘争委員会の決定），および，調停委員会 Conciliation

注（1）　タフ・ヴェイル鉄道のストライキの経過に関しては，「タフ・ヴェイル判決とイギリス鉄道労働運動」（Ⅰ），（Ⅱ）（『三田学会雑誌』79巻5号，1986年12月号；81巻3号，1988年10月号）を参照されたい。

（2）　エウィントン配置転換に関する商務院調停の結果については，「同上」（Ⅲ）（『同誌』82巻2号，1989年7月号）のpp. 23-26 を参照されたい。

Boardを設置すること（カーディフの大資本家 W.T. ルイスが提案し，T.V.R. 会長ヴァスルから商務院書記ホップウッド宛8月26日付および8月29日付書簡で明記されたこと）は，最終的には締結条件には入っていない。労働組合は肝腎な点を締結条件に書き入れることなしに，ストライキを終らせたのである。以後，組合は「スト破り」の解雇と調停委員会の設置を T.V.R. に対して要求しつづけるが，ことごとく無視される。T.V.R. 側は締結条件に書かれていないという理由で，2点の不履行を正当化したのである。その結果，新たな労使間の対立が生じ，1900年末から翌年初めにかけてとりわけ対立は激化し，再びストライキ突入の可能性も大きくなった。しかし，このような1900年9月以降「タフ・ヴェイル判決」がでる1901年7月までの期間の推移は，A.S.R.S. の本部や総書記 R. ベルの報告でも欠落している部分である。(3) それには理由があるのであって，本部およびベルは，南ウエールズの鉄道労働者の闘争に手を焼いており，先のストライキ後の新たな戦闘性の高揚には目をつむり，公式には一切関知しないという立場を採ったからである。再度ストライキに入ったならば，A.S.R.S. 本部は不承認，これがベルの方針だったのである。

従来の研究史（例えばバクウェルの著書）(4) でも，ストライキ終結から1901年7月までのタフ・ヴェイル労働者の運動は看過されてきた。すなわち，1900年8月末と9月の高等裁判所ファーウェル判決による T.V.R. に有利な決定，つづく同年11月の控訴院でのそれを覆す A.S.R.S. に有利な決定，そして8カ月後の1901年7月の上院における「タフ・ヴェイル判決」＝ファーウェル判決を復活させ，T.V.R. の主張を認める決定，という諸々の判決の変転が叙述されるだけに終り，タフ・ヴェイルの1900年8月のストライキ以後は闘争は終息したかのごとき印象を与えてきた。だがそれは，A.S.R.S. 本部の報告（主として R. ベルによる報告）が，すでに指摘した理由でそのように書かれていることの研究史への反映であって，もし A.S.R.S. の全国大会議事録や本部執行委員会議事録には載せられていない（時には意図的に隠された）当該関連速記録や地方新聞をトレースするならば，異なった像が描かれるであろう。その像を描くことを目的とする本稿では，ストライキ終結以後にもタフ・ヴェイル労働者の闘争が新たに生じたことが明らかになるだろう。そして，その中で，組合にとっては何故ストライキに再度突入できなかったのか，一方，T.V.R. が何故ストライキ締結条件を一方的に「無視」しつづけることができたのか，といった問題が，解明されるであろう。1901年7月22日の上院の「タフ・ヴェイル判決」は，何故かくも容易に控訴院判決を逆転させ，T.V.R. に有利な決定をすることができたのかを解く鍵の一つも，1901年6月，A.S.R.S. 本部が闘争中止を指示し，タフ・ヴェイルでの運動が急速に終息したことにある，というのが私の見解なのである。そしてさらに，1901年6月16日の A. マーチによるベルの告発をめぐる尋問の過程で，ストライキ終結時の「スト破り」排除をめぐる全く予期せぬ事実が明らかにされることによって，

注（3） A.S.R.S., *The Taff Vale Case and Injunction*, 1902.

（4） Philip S. Bagwell, *The Railwaymen*, 1963, p. 222. 数行 T.V.R. が調停委員会設置と「スト破り」排除を無視したことは書かれているが，その間のタフ・ヴェイル労働者の運動については書かれていない。

A.S.R.S. 本部と南ウェールズ支部との間の労働組合における中心—周縁の関係，および，R. ベル—J. ホームズ—南ウェールズ労働者という三層構造がいっそう明瞭に浮び上ってくるだろう。

スト終結1週間後の9月7日，A.S.R.S. の機関誌『レイルウェイ・レヴュー』は，すでにつぎのように書いていた。「暗黒の時間は，いまや夜明けを迎える。ホップウッドが失敗したあとすぐに入ってきたサー．W.T. ルイスの熟達した調停によりストライキに終結がもたらされ，ついに平和がいきわたった。……（ストライキの）主要な原因は，ベル氏との会見を拒否した会社の愚かな政策である。……第2の困難な点は，導入された——自由な free というより，導入された imported という方が，より正確な呼称である——労働者の問題である。これは一度ならず妥結がほとんど座礁しかけた岩であり，もしその岩がとり除かれないならば，新しい紛争が生じるかもしれない。」(5)

T.V.R. によって「スト破り」は1カ月以内に排除されると労働組合が予測していたのに対し，T.V.R. はかれらの一部を継続雇用した。T.V.R. はストライキ中に200名近い「スト破り」を「自由労働者」と称して雇用したが，ストライキ終結4カ月後の1900年末になってもなお，そのうち70名を継続雇用していた。これはエウィントンだけでなく，ストライキ以前から雇用されていた数名の復職を T.V.R. が認めないという問題と絡みあって，労働組合側の大きな闘争課題となっていった。

「スト破り」を T.V.R. が継続雇用する方針であることは，ストライキ後間もなく組合も捉えている。1900年9月9日の闘争委員会は，つぎのような決議をしている。「タフ・ヴェイル鉄道会社がスト破りたちに業務にとどまるよう説得している行為は，締結条件に明確に違反する。これらのスト破りのうち数人は辞めたいとの意向をほのめかしたが，会社はかれらの賃金を保有し，他の強制的方法も採用して，ヴァスル氏（T.V.R. 会長—引用者）の書簡に示された意図を壊している。」(6)

また，調停委員会 Conciliation Board を設置するという提案も，T.V.R. は無視することが明らかになった。その設置は，ストライキ中の8月24日にカーディフの大資本家 W.T. ルイス（W. T. Lewis）が提案したもので，南ウェールズのタフ・ヴェイルを含む5ないし6の鉄道会社と労働者代表から構成されるはずだった。商務院長官リッチーも賛成し（8月28日），闘争委員会は8月29日にその原則を承認し，10月末までに詳細を決定することとしていた。スト終結を決めた8月31日のタフ・ヴェイル労働者の大衆集会でも，この調停委員会設置は確認されている。だが，締結条件のなかにその設置を明記しなかった点が，禍根を残すことになった。

スト終結後 T.V.R. から，いっこうに調停委員会設置の方向が示されなかったので，9月23日，闘争委員会は労使双方の代表から成る調停委員会の設置を求め，ルイスにその計画案をつくり，南ウェールズ地方の各鉄道会社の労働者に提示することを依頼した。さらに，闘争委員会は，南ウェールズだけでなく A.S.R.S. 全体がこの調停委員会制度を承認することも求めて，つぎのように決

注（5） *Railway Review*, September 7, 1900.
（6） Men's Committee Minutes Book, September 9, 1900.（手稿）（MSS. 127/AS/TV/1/1/1）

議している。「本委員会は年次総会につぎのようにアピールする。最近のタフ・ヴェイル鉄道争議の終結時に到達した締結条件のなかで言明されている調停制度に，会社側が同意するよう A.S.R.S. が保障させること。もし必要ならばそれを強制させること。」(7)

その1週間後の9月30日，闘争委員会は，「スト破り」排除と調停委員会設置というスト終結条件が依然として実行されていないので，それの実現を求めてバリー，リムニー，ビュートの3つの鉄道会社の労働者と共同アピールをだすことを決め，10月7日にはW. T. ルイスの協力を求めた。(8) そして10月21日には，カーディフのアンドリュー・ホールで，バリー，リムニー，タフ・ヴェイル，カーディフの4つの鉄道の労働者による大衆集会を開いたのである。(9)

総選挙が終った直後だった。集会には，ベルもホームズも参加した。炭鉱夫組合からも B. デーヴィスと K. オニオンが出席し，まずベルがダービー選挙区から再選されたことを祝ったのち，タフ・ヴェイル労働者の復職問題，労働条件の向上の問題（スト以前より改善があったか否か），「スト破り」排除の問題について報告がなされた。集会後，4つの鉄道会社から7名ずつ，計28名の代表が，T.V.R. のビーズリー社長と会見したが，「スト破り」排除を交渉議題とすることを T.V.R. は最初から拒否した。埒があかず，闘争委員会は，調停委員会の設立のため共闘・支援を拡大する必要を痛感し，炭鉱夫組合や他の労働組合に支援を求めると同時に，カーディフ商業会議所にも諒解を求めた。

エウィントンに対する T.V.R. の処置を妥当と判定したのが，1900年10月20日。その後，エウィントンを含め5名の復職が実現していなかった。11月26日，組合は T.V.R. 社長ビーズリーと会見したが，席上，復職していない2名（Avery と Senior）について ビーズリーは，「これらの人々は会社の施設内での暴力行為と騒擾行為の罪がある」と語った。組合側はかれらは法的に無罪になったと反論したのに対し，ビーズリーは，その判決は誤審である，判事 G. ウィリアムズも誤審だったとビーズリーに伝えてきたと言明して，物議をかもした。(10)

タフ・ヴェイル闘争委員会は11月27日付で ビーズリー宛に書簡を送り，「締結条件についていかなる解釈がなされようとも，労働者は導入された人々が1カ月以内に離れると明確に理解して（on the explicit understanding），仕事に復帰することに同意したということを，会社役員は我々に印象づけた。この印象は，8月28日付ヴァスル氏の書簡に含まれている字句により，形づくられた。そのなかで，かれは導入された人々に対してなされる義務に言及し，かれらは金を支給したり他の方法により排除されるべきであると述べている」(11)と書いた。ビーズリーはただちにこの組合側の主張に反論を加え，11月29日付書簡で，8月28日付書簡ではたしかに復職は認めると書いたが，「スト

注（7） *Ibid.*, September 23, 1900.
（8） *Ibid.*, September 30, October 7, 1900.
（9） *South Wales Daily News*, December 24, 1900.
（10） *Western Mail*, December 28, 1900.
（11） Letter from D. B. Radley to A. Beasley, November 27, 1900, in Men's Committee Minutes Book, November 26, 1900.（手稿），*op. cit.*

破り」を1カ月以内に排除するとは書いていない。それ故，組合側のいうように「スト破り」を排除すると「明確に理解する」というのは当らない，と書いた。そして，8月28日付のヴァスルからホプウッド宛書簡は締結条件を構成しないと断言した。さらに，8月30日付の問題のビーズリーからW. T. ルイス宛書簡には，「スト破り」について T.V.R. が自由裁量権をもつと明記されているではないか，と「スト破り」を雇用しつづけていることの正当性を主張した。[12] この8月30日付 T.V.R. 社長ビーズリーから仲裁者ルイス宛書簡（以後，「ビーズリー書簡」と略す）こそ，その後の労使対決の旋回軸となったものである。

では，「ビーズリー書簡」には何と書いてあったのだろうか。たしかに，「取締役は，現在ストライキ参加者の全員の職場復帰を提案しているが，現在鉄道を運行している労働者（「スト破り」—引用者）に関しては絶対的裁量権を保持すると考えられる」[13]（傍点—引用者）と書かれている。これは大きな謎である。「スト破り」の継続雇用について T.V.R. が絶対的裁量権を保持するとする会社側の書簡をもし労働組合員が知っていたならば，ストライキ終結に組合員は賛成しなかったであろうことは明白である。労働組合員は「ビーズリー書簡」をスト終結の翌日知ったという。労働組合員ラドリーから T.V.R. ビーズリー宛書簡（12月3日）では，会社側の「スト破り」に対して「自由裁量権をもっているという主張を，労働者は仕事へ復帰するまで知らなかった。もし知らされていたら，労働者はそれを極めて真剣に検討しただろう」[14]と書いている。8月30日付書簡は，スト締結条件を結ぶ以前にルイスに届いていたのか？　労働組合指導部はそれを知っていたのか？　もしルイスにスト終結前に届いていないとすると，ビーズリーは故意に遅らせて送付したのか？　こうした諸々の可能性が考えられるが，この点は未解決のまま労使双方の主張は平行線を辿り，次第に対立が激しくなっていったのである。

12月23日，再び大衆集会が，カーディフでは午前10時30分から3時間，ポンティプリーダでは午後6時から開かれた。クリスマスが近く，仕事を離れられない者が多かったため，参加者は前回ほどではなかった。カーディフではホームズがあいさつした。長々と経過報告がなされたのち，話が肝腎の8月30日付「ビーズリー書簡」に立ち至ったとき，つぎのように語った。

ホームズ——その書簡が新聞に載ったとき，締結条件は合意されていた，というのが事実でないのか。それ以前にその手紙を入手していたならば，労働者は果して仕事に戻っただろうか。

（「ノー」という大きな叫び。）

ホームズ——それがビーズリー氏の内密の書簡に対する解答である。その書簡は合意のいかなる部分でもないのである。

聴衆の1人——もし労働者が導入された労働者が留まることになると知ったならば，労働者が職

注 (12) Letter from A. Beasly to D. B. Radley, November 29, 1900.
(13) Letter from A. Beasly to Sir William Lewis, August 30, 1900, 前稿（II），p. 80 参照のこと。
(14) Letter from D. B. Radley to A. Beasley, December 3, 1900, in Men's Committee Minutes Book, December 2, 1900.（手稿），*op. cit.*

場に戻るとは信じられない(喝采)。[15]

この集会では A.S.R.S. の年次総会が，締結条件の履行のための権限を労働者に与える決議をしたこともホームズにより報告された。また，A.S.R.S. 本部執行委員会も，12月には締結条件にある調停委員会設置が実現していないのを遺憾とする旨を決議したことも報告された。さらに，この集会では，ホームズがつぎのような決議を提案し可決され，ビーズリー宛に送付された。

「我々は現在，関連する全ての書簡と会見内容を検討した結果，1カ月以内に導入された人々の全てが排除され，旧従業員の全てが復職すると，締結条件をそれが結ばれたときと同様に理解する。我々は会社がその双方とも遂行していないことを遺憾とする。すなわち，旧従業員の数名はなお雇用されておらず，導入された70名程はなお，10年から15年勤務した旧い人々が就く資格のある職に就いている。我々は決議する。

1) 会社はただちに全ての導入された人々を排除すること。

2) 復職していない全ての旧従業員を，ただちに復職させること。

3) 会社は締結条件に記されている調停制度に原則として賛成するかどうかをただちに明言すること。

4) 上記の全てあるいは一部が実施されないときには，執行委員会は，年次総会の決議と執行委員会決議をただちに実効力あるものたらしめ，上記3点の締結条件を実施させること。」[16]

そして，ベルは議会（下院）でもこの「スト破り」の問題をとりあげることになった。

カーディフの集会につづいて，12月末までにアバーキノンとアバデーアで集会が開かれ，「スト破り」の排除と調停委員会設置が強く求められた。かくしてタフ・ヴェイルの労使対立は深刻化し，再びストライキ勃発の可能性がでてきた。1900年12月29日の『サウス・ウェールズ・デイリー・ニューズ』は，記者のインタヴューに答えて，南ウェールズの組合運動指導者 M. ジョーンズ Moses Jones が，「会社が見解を変更しなければ，（ストライキが）生じると考えざるをえない。というのは，労働者の不満はいまや去る8月のストライキ開始前よりも大きくより深刻であるからだ」[17]と述べた記事を載せている。ジョーンズは，こうも言っている。「労働者は，サー．W.T．ルイスによる調停委員会の設置が成功しなかったことにひどく失望している。……鉄道従業員と一般大衆がストライキの終結をよろこんだのは，この委員会が設立されるだろうという展望があったからだ。サー・ウィリアムがその設立を強く熱望していたことは周知のことだし，労働者に代ってかれはその提案をタフ・ヴェイル鉄道会社に行なった。このことはビーズリー氏のサー・ウィリアム宛の8月30日付書簡で評価されている。このことはビーズリー氏が，調停委員会に関するかぎりサー・ウィリアムを労働者代表として受け入れたことを示し，その日以降，労働者はその運営を完全にサー・ウィ

注 (15) *South Wales Daily News,* December 24, 1900.

(16) *Ibid.* また，Men's Committee Minutes Book には，12月23日のカーディフとポンティプリーダの集会の決議が書かれている。

(17) *South Wales Daily News,* December 29, 1900.

リアムに任せたのである。[18]」

重要なのは，この時点で，南ウェールズ地方の組合指導者が，ストライキに突入したばあい，全国組織である A.S.R.S. が今回も承認・支持するだろうとの楽観的見通しをもっていたことである。「もし労働者が過激な方法を再び採ったならば，かれらを組合が支持するだろうか」との問いに対し，ジョーンズは「イエス」と答え，「調停委員会は，当地方では殆んど既成事実であると信じられているように，全ての鉄道のコミュニティの共感を得るだろう」と述べていたのである。また，ジョーンズは，タフ・ヴェイルだけでなく，リムニー，バリー，カーディフの鉄道労働者も調停委員会設置を熱望し，闘う用意があるともいっている。このように，1900年末にかけて，南ウェールズ鉄道労働者の戦闘意欲は高まっていったのである。

2 「ビーズリー書簡」に関する T.V.R. と A.S.R.S. の対立的見解の表明（1901年1月）

かように南ウェールズでは組合指導者も一般組合員も戦闘性が高まっていたのに対し，A.S.R.S. 本部の R. ベルは，ストライキにあくまで反対の立場をとった。この構図は，先の1900年8月のストライキのさいと同一である。『サウス・ウェールズ・デイリー・ニューズ』は，ロンドンのベルとの会見に成功し，1901年1月3日に応答を載せている。ストライキが終結したのはビーズリーとルイスの間の交渉の結果であると指摘したのち，ルイス宛の「ビーズリー書簡」をめぐる「ミステリー」について，つぎのように応答している。

記者――8月30日付ビーズリー氏の書簡に話を戻したいのだが，そこでかれは鉄道で働いている人に関しては自由裁量を主張している。これについて，あなたはどう考えるか？

R. ベル――私がそれについていえることの全ては，サー・ウィリアム・トマス・ルイスは，労働者が最後にかれに会い，実際に審議の終結に同意した以前に，この書簡を受けとるのは全く不可能だったということである。

記者――しかし，その日時は8月30日だったのでは？

ベル――そう。労働者が大衆集会を開いた前日である。

記者――ビーズリー氏の書簡が返信を意味するにもかかわらずか？

ベル――そのとおり。

記者――タフの取締役が外からの労働者に対して自由裁量権があるとした問題は，労働者の（闘争）委員会で討議されたことがないのか？

ベル――ない。それは労働者に知らされたことはない。……サー・ウィリアムも最終締結前にこの書簡をみたことがない，ということは全くありうることである。かれはその日1日中超多忙だった。労働者が争議の終結に最終的に同意してエンジェル・ホテルのかれと別れたのは，深夜を過ぎていた。交渉はサー・ウィリアムとビーズリー氏と口頭で行なわれたので，サー・ウィリアムが，

注 (18) *Ibid.*

労働者委員会が最後の会見後かれと別れたとき，この書簡を受けとっていたと信じることは全くできない。

記者――終結前に，サー・ウィリアム・ルイスがビーズリー氏に「自由裁量」の字句を削除させる努力をしたという噂は，真実と思うか？

ベル――いや，私はそれについて知らない。前述したように，我々はそれについて何も知らなかったのだから。

……

記者――締結条件に示唆されている調停制度に関して，あなたはその進展があったかについて，サー・ルイスから何か連絡があったか？

ベル――いや，いかなるものもない。しかし議会のつぎの会期に私はこの事で何らかの行動をするつもりであるし，さらにこのような破滅的ストライキに終止符を打つ手段を法制化する努力をしたい。(19)

ここにはR．ベルの労働組合有責論が示されているが，後述することとの関係でとくに確認しておきたいことは，ベルが，A.S.R.S. 本部総書記として，ビーズリーからルイス宛の「自由裁量権」を主張した書簡を，闘争委員会や一般労働者はもとより，ベル自身も全く知らずにストライキを終結し，その翌日，それを初めて知ったとしている点である。R．ベルは仲裁に入ったルイス自身も終結を決定した後に，その書簡を入手しているとみているのである。ビーズリーに「自由裁量」の字句の削除をルイスが求めたという噂については，「知らない」と答えている。であるならば，闘争委員会議長ビードンがスト終結条件受諾の返信をビーズリー宛にだしたことはどう説明するのだろうか。ベルは本当に「自由裁量」の字句を含む書簡について，スト終結以前に知らなかったのだろうか。

1901年1月7日，T.V.R. 社長ビーズリーは，各従業員宛に長文の書簡をだした。このような書簡を出さざるをえなかったことは，労働者の不満と反抗がそれだけ高揚していたことの証左でもあるが，ビーズリーはこの中で，前年11月の控訴院での敗訴にもエウィントンの再雇用を認めなかった商務院決定にも全く触れず，ひたすら「スト破り」の雇用については会社側に自由裁量権があること（しかも8月30日付書簡でそのことを明示していること），調停委員会設立も「契約の自由」を侵害するものであること，この2点を主張している。(20) これに対し，ホームズはただちに1月8日付で反論を加え，2点の批判が事実でないことを繰り返し説明した。一方，ベルは，タフ・ヴェイル労働者に対して，「ストライキに至るいかなるステップをとることも（A.S.R.S. 本部執行委員会により）承認されていないと明確に述べ」，(21)「タフ・ヴェイルで起っている事態について公式には何も知らな

注 (19) *Ibid.*, January 3, 1901.
(20) Western Mail, January 8, 1901.
(21) *Ibid.*, January 9, 1901; *South Wales Daily News*, January 9, 1901.

い[22]」という立場をとったのである。

1月7日のビーズリー声明は，タフ・ヴェイル鉄道以外にも，反響を呼びおこした。『シッピング・ガゼット』は，「有益な声明」と小見出しをつけ，「先のストライキの原因，締結条件，導入された労働者の中で残った数，去った数，古い労働者の地位，調停委員会制度について，完璧な詳細な声明を労働者にだした」と T.V.R. に熱い眼差しを送り，つづけてこう書いた。「会社側は終始良心にもとづいて行動し，締結条件を厳格に守っている。……声明は会社の労働者の大多数により歓迎された。さらに扇動する余地が残っていないことは確実である[23]。」『シッピング・ワールド』の方は，多少論調が異なり，全く T.V.R. に共感を寄せているわけではない。「一条の陽光がベル氏の声明によってさしこんだ。ホームズ氏側の現在の活発な扇動は，鉄道組合の承認を得ていない。しかし，扇動は別として，ひどい不満足と失望の感情がタフの労働者の間に広まっており，最終的に除去されるまでは危険な要素であるだろうことは疑いない[24]。」『タイムズ』は，いつものように T.V.R. に追随した。ビーズリーが「スト破り」を排除しなかったことを高く評価し，もし排除していたら「『タイムズ』のコラムでかれの行動を支持することは不可能だっただろう[25]」とまで書いた。2点挙げられた理由が傑作である。第1に，新入者の利益が守られねばならない。第2に，もしその利益が損われたら，つぎにはかれらは助けにこなくなってしまうだろう。というのである。そして，1,200名の旧従業員の中に79名の新入者がいるにすぎない。「労働者にとって賢明なことは，扇動者の声をきくことを拒否することである[26]」と主張するのである。ここで『タイムズ』が，T.U.C. 内のベルとホームズの立場を，つぎのように報道している点も興味深い。「T.U.C. では，結局ベル氏は理性的に行動したという理由だけで影響力と人気を大きく失った。一方，地方書記ホームズ氏の給与は上ったのに対し，ベル氏の書記としての地位は危うくなっている[27]。」T.U.C. 内部の社会主義者（ホームズ）とリブ＝ラブ派（ベル）の対抗関係をある程度反映した記事ではあろう。一方，『タイムズ』とは対照的に，『マンチェスター・ガーディアン』はホームズがビーズリーの挑戦を受けるか，それとも闘争を放棄するか，2つに1つの選択を迫られていると報じている[28]。いずれにせよ，地方紙だでなく，全国紙もタフ・ヴェイルの闘争の成行きに注目していたのである。

注 (22) *Commerce*, January 9, 1901. Western Mail January 10, 1901. にも同様の記事がある。
(23) *Shipping Gazette*, January 9, 1901.
(24) *Shipping World*, January 9, 1901.
(25) *The Times*, January 10, 1901.
(26) *Ibid.*
(27) *Ibid.*
(28) *Manchester Guardian*, January 9, 1901.

II　タフ・ヴェイル鉄道労働者運動の内包する諸矛盾

1　A.S.R.S. 本部とタフ・ヴェイル闘争委員会の不一致の再現

1901年1月13日，労働者闘争委員会が，カーディフのコルボーン・ホテルで開かれた。議長はG.ビードン。南ウェールズの各地から7名の委員が集まり，欠席したのはT.ヒューズのみ。ペナースからA.マーチ March，ポンティプリーダからM.ジョーズ Jones，フェルンデイルからファーマー Farmer，トレハーバートからミラード Millard，メルティールからデイヴィス Davies，アバデーアからジョーンズ Jones，アバーキノンからコリーア Collier，いずれも当地方の鉄道労働組合の指導者たちである。この日闘争委員会は，つぎのようないくつかの重要な決定をする。第1は，「事態の重要性に鑑み，我々は再び，導入された労働者と調停委員会の件で会見することを（T.V.R.の）会長に申し入れること」，第2は，「タフ・ヴェイル鉄道で生じている状況を南ウェールズとモンマスシャーの炭鉱夫に周知させるために，当委員会代表と会見すべく炭鉱労働組合執行委員会に要請すること」（この要請が容れられたならば，R.ベルも同席するとした），第3は，南ウェールズのバリー，リムニー，カーディフの3つの鉄道会社の労働者に対して，調停委員会設置に関して共同討議をするので，状況を周知させること，第4は，「新聞に書かれたこの運動を承認する（A.S.R.S.の）年次大会議事録に関する誤りを，ベル氏に指摘する書簡を書くこと」，第5は，南ウェールズの運動の状況を正確にA.S.R.S.本部に通告してきたこと，以上の5点を決議したのである。[29] 最後の点に関して，「我々の書記（ホームズ）はベル氏に情報を送ることに関し，かれの任務を果したと我々は同意する」[30]と，わざわざ決議しているのは，前回のストライキのときのように，本部総書記ベルが南ウェールズからは運動の進展について情報を得ていないと主張するおそれがあったからである。果せるかな，ベルは，1月17日付『ウェスタン・メイル』に，ビーズリーの1月7日の声明以降，「タフ・ヴェイルに関して誰からも何もきいていない」[31]と言明している。約2カ月後の3月11日には，公式にA.S.R.S.本部執行委員会において総書記ベルは，1月13日の労働者委員会の先の決議のなかで，炭鉱労働組合執行委員会との会見を要請した第2番目の決議を読みあげ，（第4番目や第5番目のベル宛の要請は触れないで），つぎのような不満を表明した。「私はこの決議の写しを受けとるまで，炭鉱夫と会見するいかなる提案についても全く何も知らなかった。私はそのような問題で他の組合に接触するのは，この組合の執行委員会の地位を地方委員会が侵害していると考える，との趣旨の返信を書いた……。私は地方委員会が活動する非組織的な方法に不満を表明せざるをえない。」[32] またしても，A.S.R.S.本部は南ウェールズの闘争委員会に圧力をかけるので

注（29）Men's Committee Minutes Book, January 13, 1901.（手稿），*op. cit.*

（30）*Ibid.*

（31）*Western Mail*, January 17, 1900. ベルの言明に対し，翌日ポンティプリーダのM.ジョーンズは，導入労働者排除と調停委員会を要求したカーディフの集合にベル自身出席していたではないか，と激しく批判した（*ibid.*, January 18, 1901）。

ある。

かくして1月後半になると，1月7日の T.V.R. 社長ビーズリーの書簡により，労使の対立は爆発寸前にまでいった。「いっそうのトラブルが生まれ，たぶん争議はもう一つのストライキを結果するだろう。……なんらかの（労使）相互の満足できる措置は望めそうもない[33]」状況となった。闘争委員会は，ベルがタフ・ヴェイルのアジテーションは「公認されていない」'unauthorised' であるとしたことに，激しい抗議文を送った[34]。R. ベルも翌日地方新聞紙上に長文の反論を書き，先のストライキと異なり，「組合活動に関して65,000人の全組合員に責任をもち組合財政にも責任をもつ役員の手に，（タフ・ヴェイルの）運動の完全なコントロールがおかれねばならない[35]」と主張した。

ここで注目すべきことは，タフ・ヴェイル労働者が，他の鉄道労働組合や炭鉱労働組合と共闘すべく準備に入ったことである。これは極めて重要なステップだった。かれらの支援なくしてタフ・ヴェイルだけでストライキに突入しても勝算のないことを，前年8月のストライキから思い知らされていたのである。

闘争委員会は，T.V.R. との交渉も続けた。1月22日に，T.V.R. は1月7日付の前掲声明は撤回しないとしながらも，導入された労働者について1月28日2時より組合側と会見する用意のあること，鉄道労働者の各職階から1名ずつと信号手1名の出席が許されること，ただし調停委員会設置については議題としないことを決めた[36]。組合指導者 M. ジョーンズは，信号手から貨物検査員に降格されていたので，信号手代表として交渉に参加することを拒否された。会見当日の1月22日にもジョーンズは拒否されたが，闘争委員会側からの代表5名と T.V.R. との会見は1時間半続いた[37]。T.V.R. 側は「スト破り」の排除を断固拒否し，「他の労働者が働くのを拒否したとき，かような労働者が会社を助けにやってきたのだから，かれらをあらゆる犠牲を払っても雇用しつづけることが会社側の意図である[38]」と強硬に主張した。

2月17日，闘争委員会は，午後2時から炭鉱夫組合の代表と会見したが，ベルもサンターも他に用事があるとして同席していない[39]。ストライキに鉄道労働者が突入したとき，いかなる支援を炭鉱

注 (32) *General Secretary's Report to the Executive Committee,* March 11, 1901, in A.S.R.S., *Proceedings and Reports for the Year, 1901,* pp. 12–13.

(33) *Engineers,* January 18, 1901.

(34) *South Wales Daily News,* January 21, 1901.

(35) *Ibid.,* January 22, 1901.

(36) *General Secretary's Report to the Executive Committee,* March 11, 1901, *op. cit.,* p. 13.

(37) *South Wales Daily News,* January 29, 1901; *Western Mail,* January 29, 1901. M. ジョーンズの交渉の場への拒否については，*South Wales Daily News,* February 2, 1901; *Western Mail,* February 1, 1901 を参照。ジョーンズは結局，組合役員を辞任した（*South Wales Daily News,* March 4, 1901）。

(38) *General Secretary's Report to the Executive Committee,* March 11, 1901, *op. cit.,* p. 13.

(39) 出席者は，タフ・ヴェイル闘争委員会から G. Beadon (Chairman), M. Jones, W. Reed, A. Tackley, D.B. Radley の5名であった (Deputation Committee, February 17, 1901, in Men's Committee Minutes Book, (手稿), *op. cit.*)。

労働者から得られるかを確認するのが，会見の目的だった。炭鉱夫組合代表は，両組合の執行委員会の合同会議を開いてその件を検討することを示唆し，そして炭鉱夫組合はその課題を持ち帰り検討することにした。[40] 夜7時，委員会はベルとサンター宛に，この日の経緯を知らせる報告書を書きはじめた。新聞には何の情報も与えないことにした。[41]

2月19日，ベルは闘争委員会宛に折り返し書簡を送ったが，そこにはつぎの3点が書かれていた。第1点は，「労働者と会社との間に存在する相違は，貴殿が執行委員会にアピールを求めるほど重大な性質のものであるか。」第2点は，「T.V.R. の制度全般についての労働者の感情を完全に考慮すること。」第3点は，「もしストライキに入ったならば，T.V.R. の労働者自身には，どの程度ストライキに成功する可能性があるか」である。ここでも，A.S.R.S. 本部の認識は南ウェールズの現地とは大幅にズレていることが示されている。2月24日に開かれた闘争委員会は，ベルの指摘した以上の3点を検討し，全支部で大衆討議するとともに，代表2名を A.S.R.S. 本部執行委員会に送ることを決めた。その日を3月16日とし，ホームズの同行も求めた。同時に，「我々の本部執行委員会に締結条件を正当に遂行するための運動の実行を承認するよう要請」している。加えて，昨年の A.S.R.S. の年次大会と12月の本部執行委員会の決定を実施するよう求めている。奇々怪々なのは，ベルがこの時点で，昨秋の A.S.R.S. 年次大会で決議された「タフ・ヴェイル鉄道の先の争議終結のさい到達した締結条件で言及されている調停委員会を，会社側に賛同することを保証させること。もし必要ならば強制すること」が，組合機関誌『レイルウェイ・レヴュー』には載ったけれども，大会議事録にはみつからないと述べていることである。[42] この組合機関誌は，社会主義者が編集部をコントロールしており，必ずしも A.S.R.S. 本部執行委員会が掌握し切れていなかったという事情を考慮するならば，ベルの「大会議事録にはみつからない」という言明（執行委員会での公式の言明である）が，ストライキを嫌う本部の姿勢を投影したものとして一定の意味をもってくる。このように，タフ・ヴェイル闘争委員会は，一方では，地域の他の鉄道労働者や炭鉱夫の支援を求めると同時に，自らの組合の本部の支援も求めなければならなかったのである。

こうして，ようやく3月16日にタフ・ヴェイルの組合代表2名が，ホームズも加わって，A.S.R.S. 本部執行委員と会見することができ，前年夏の争議の締結，現在の状況，調停委員会の設置の3点についてそれぞれ15分間ずつ話すに至った。[43] 本部執行委員会は，その結果，全会一致で「スト破り」に対する「自由裁量権を挿入したビーズリーの8月30日付書簡について，代表団と総書記

注 (40) *Ibid.*

(41) *Ibid.* しかし，このウェールズ炭鉱夫とタフ・ヴェイル闘争委員会との会合は，1901年2月18日付で，*Western Mail, South Wales Daily News, Shipping Gazette* が報じている。とくに *Western Mail* は，「非公認の争議には支援不可能」との見出しをつけている。もちろん「非公認」とは，A.S.R.S. 本部が公認していないことを，また，「支援不可能」とは炭鉱夫によるタフ・ヴェイルの労働者に対する支援が不可能であることの意味である。

(42) *General Secretary's Report to the Executive Committee,* March 11, 1901, *op. cit.*, p. 13.

(43) *South Wales Daily News,* March 14, 1901.

の話をきいた結果，我々は，我々の役員と組合員に関するかぎり，8月31日に南ウェールズ新聞にその書簡が現われる以前には，その知識をもっていなかったこと，および，我々の組合員は正確な状況についての誤解の下に仕事に復帰したことを完全に確認する[44]」と決定した。「ビーズリー書簡」について（ベルの見解ではなく）A.S.R.S. 本部執行委員会がかような声明をだしたのは，問題が表面化してから半年以上も経ってからということになる。本部執行委員会の対応の遅さを否めない。

2　炭鉱労働者等との共闘の可能性

1901年3月にようやく重い腰を上げた A.S.R.S. 本部は，タフ・ヴェイルでストライキに入ることにはなお消極的であった。4月初めにはタフ・ヴェイルで火夫が解雇され，抗議のための大衆集会が開かれ，ホームズが演説。かくしてもう一つの争点が加わった[45]。一方，A.S.R.S. 本部執行委員の交代があり，新しい委員は積極的に南ウェールズの状況把握にのりだした。かれらは5人から成る副委員会を設け，（会長，総書記とともに）カーディフに行き，タフ・ヴェイル鉄道労働者はどの程度闘う用意があるのか，また，他の鉄道労働者と南ウェールズ炭鉱労働者は，どの程度支援する用意があるのかを視察することにした[46]。「他の鉄道――バリー，リムニー，カーディフ――に雇用されているもの，および南ウェールズの炭鉱夫の協力なしには，かれらは成功しないと感じた[47]」からである。

4月28日，A.S.R.S. 本部の副委員会が，カーディフへ行き，鉄道労働者代表と会見する。本部側からはブロディ Brodie, ジョージ George, ペイリン Palin, ジョーンズ Jones, フィップス Phipps の5名の副委員と会長サクストンと総書記ベルの計7名であった。南ウェールズの各鉄道の組合代表は合同代表団を結成して迎えた。タフ・ヴェイル鉄道からはビードン Beadon, リムニー鉄道からはルイス Lewis, カーディフ鉄道からはプレスコット Prescott, バリー鉄道からはバージェス Burgess が代表であったが，ホームズはいなかった。会見は，カーディフのマスケル食堂で午前10時に開始された。ホームズに至急電報を打ち，すぐに参加するよう求めたが，のちにこれは取り消される。本部は各鉄道代表者毎に会見し，その間「他の者の入室禁止」とする意向であったが，合同代表団はただちにこの方法に「正式に抗議し，全ての人が自由に同席できることが望ましい」とし，結局，全代表が同時に入室することが認められた。この会議については「厳秘」'very confidential' と記入された議事録が残されている[48]。（『レイルウェイ・レヴュー』にもこの会合の記事は載って

注 (44) *Minutes of Executive Committee of A.S.R.S.*, March 16, 1901, p. 76.

(45) *South Wales Daily News*, April 1, 1901; *Western Mail*, April 1, 1901; *Manchester Guardian*, April 1, 1901; *Engineers*, April 5, 1901.

(46) *South Wales Daily News*, April 29, 1901.

(47) Letter from R. Bell to T.G. Sunter, Associated Society of Locomotive Engineers and Firemen, April 18, 1901.（1頁のタイプ刷）(MSS. 127/AS/TV/3/24/14).

(48) *Minutes of Executive Committee sub-committtee to receive deputations from Taff Vale, Barry, Cardiff and Rhymney railways, at Cordiff*, April 28, 1901.（4頁のタイプ刷）(MSS. 127/TV/1/3).

いないが，『サウス・ウェールズ・デイリー・ニューズ』は短い記事を載せている。[49]）以下は，この議事録の抜粋である。

ビードン（タフ・ヴェイル鉄道闘争委員会議長）——争議終結のとき，労働者は導入労働者は皆いなくなり，調停委員会が設置されるだろうとの見解をもった。未だ実施されていない。導入労働者を排除し，委員会を設置させるべく極めて断固たる決意をしている。しかし，当時（昨年夏のストライキ）より今回はもっと困難になることを知って欲しい。前の争議に参加した労働者の決意は固い。もし執行委員会が炭鉱夫とタフ・ヴェイル労働者に有利になるよう交渉する見通しを明確にもちうるならば，かれらは武器をとる用意がある。もし執行委員会が他の鉄道と炭鉱夫の支援を得るならば，先の争議に参加したタフの労働者は準備ができている。

マーチ（タフ・ヴェイル鉄道闘争委員会）——タフ・ヴェイルの労働者は導入労働者が1カ月以内に排除され，調停委員会が設置されるという誤解の下に仕事を復帰した。もし労働者が，これは実行されないと知っていたならば，決して仕事に戻らなかったであろう。労働者は誤解の下に，誤った説明の下に，仕事に戻ったというのが，先の争議に関する事実である。

リード（タフ・ヴェイル鉄道闘争委員会）——現在の状況はこうである。混乱，闘争，苛立ちは，スト破りが排除され，調停委員会が設置されるまで続くだろう。炭鉱夫の支援が得られないならば，4つの地方鉄道はこれを実現するには力量がない。財政的援助が炭鉱夫にもし同意するなら与えられねばならないことを認めても，である。

以上のように，炭鉱夫が同情ストに入り，タフ・ヴェイル労働者を支援してくれるか否か，これがタフ・ヴェイルの労働者がストライキに入ったばあい成功するか否かの鍵である。闘争に入る精神的準備はできている。問題は炭鉱夫の支援があるか否かである。こう A.S.R.S. 本部に訴えているのである。これらの質疑の中でスト締結条件に署名したビードンが，「ホームズは締結条件を労働者が受諾した会合には出席していたが，サー．W.T.ルイスとの会合には出席していない」と述べたあと，「(闘争）委員会は，コルボーン・ホテルで書簡の自由裁量の文言を憶えていない」（傍点—引用者）と述べており，その書簡そのものが翌8月31日に新聞に現われるまでは知らなかったとする前出の組合公式見解（3月16日）と微妙な食い違いをみせている点にも注意しておきたい。

つづくバリー鉄道労働者の代表は，タフ・ヴェイル鉄道との連絡が滞っていることを批判したが，ストライキになれば，そして炭鉱夫の支援が得られるならば，自らも支援に立ち上がると言明した。

ウィリアムズ（バリー鉄道労働組合）——バリー労働者が無関心である真の原因は，タフ・ヴェイル労働者が情報をよく与えてこなかったことにある。しかし，もし炭鉱夫から支援する何らかの保障が与えられ，かつ，タフの労働者が自分自身闘う断固たる用意があるならば，バリーの労働者も支援に立ち上がるだろう。

バージェス（バリー鉄道労働組合）——ストライキ終結後，9名が調停委争会設置を考える合同運

注（49） *South Wales Daily News*, April 29, 1901.

動をすべく選出されたが，しかしそれ以後ベル氏，ホームズ氏，ラドリー氏からこの会議の書簡を本部からもらうまで何も聞いていない。もしバリーで投票が行なわれたならば，多数がよろこんでタフ労働者を助けるためにやってくると信じる。ただし，このばあいも炭鉱夫の支援があることを条件とする。

カーディフ鉄道からの代表プレスコットは，2週間前に開いた会合では反応は「極めて弱く」'very poor', 140名の組合員のうち25名しか参加していないという。しかし，「昨年8月にその組合の外にいた労働者は，その労働組合員と同じようにタフの労働者を支援する熱烈な用意がある」という決議はしている。また，リムニー鉄道からの代表も，A. S. R. S. の本部からの書簡を受けて会合を開いたが[50]，出席者は「少数」'small number' であったと述べた。代表ルイスは，「もし（A. S. R. S. 本部の）総書記のコントロールの下にあるならば，タフの労働者を支援する用意がある」と語った。このようにみてみると，タフ・ヴェイル以外の南ウェールズの鉄道労働者は，必ずしも積極的にタフ・ヴェイル労働者の闘いに関心をもち，支援する意志をもっていたわけではないことがわかる。いずれも炭鉱夫組合の支援いかんであるという見解であった。組合員のストライキ投票が先か，炭鉱夫への連絡が先かと問われて，ルイスは，「鉄道労働者の投票をかける前に，炭鉱夫に支援の確証が得られるかをまず問い合わせるべきである」と答えている。

かくして4つの南ウェールズの鉄道の代表団との会見は終った。午後3時45分，代表団は離れた。代表団の説明をきいた副委員会は，つぎのような報告書を作成し，A. S. R. S. の本部執行委員会に提出した（提出したのは，1901年5月26日）。「締結条件の T. V. R. 会社による実現の仕方に対し不満が広まっており，調停委員会設置と導入労働者の排除を強制するために，関係者の大多数は闘う用意があると我々は考える[51]。」

ストライキ突入の鍵は，南ウェールズの炭鉱労働者の支援が得られるか否かにあった。ベルは4月10日付で南ウェールズ炭鉱連盟 S. W. M. F. の総書記トマス・リチャーズ Tomas Richards 宛に，「タフ・ヴェイル鉄道員は，南ウェールズの炭鉱夫の協力の約束がなければ，この闘いはほとんど有効ではないと感じている[52]」と書き，会見を申し入れた。鉄道労働者代表と会う前日の4月27日を会見の予定日としていたが，S. W. M. F. 側は他の用務で多忙との理由で会わず，ベルは5月3日に再度会見を申し入れ，それでも返答がなかったので5月9日更に申し入れ，ようやく5月17日に

注（50）リムニー鉄道労働者がタフ・ヴェイルの労働者を支持するか否かで集会を開いたことは，*South Wales Daily News*, April 15, 1901; *Western Mail*, April 14, 1901. に報じられている。のちに A. マーチによるベル批判の発言（後述）がでたのは，この集会においてである。

（51）*Minutes of Executive Committee sub-committee*, April 28, 1901, *op. cit.* この報告書は *Report of Sub-committee re Taff Vale Dispute*, May 26, 1901. といい，J. Phipps, M. Jones, G. W. George, J. Brodie, J. H. Palin が署名しているもので，速記録の鉛筆書きのものは，AS/TV/1/3/ii に添付されている。なお，*General Secretary's Report to the Executive Committee*, May 26, 1901, p. 13 にも再録されている。

（52）Letter from R. Bell to Thomas Richards, General Secretary of South Wales Miners Federation, April 16, 1901.（1頁のタイプ刷）（MSS. 127/AS/TV/3/24/2）

返信を得た。会見は，5月25日に A.S.R.S. 本部で開かれることになった。A.S.R.S. 側は5名の副委員，会長，総書記の計7名，炭鉱夫側は，ブルース W. Bruce，モルガン Watts-Morgan，エヴァンス F. Evans の3名が出席した。総書記リチャーズは，炭鉱事故現場にでかけたため出席できなかった。(53)

ここでは，以下のような質疑応答がなされたが，その中には過去の苦い経験から鉄道労働組合は炭鉱夫組合の連帯と支援を求めているのに対し，炭鉱夫組合は，現実的利害関係も考慮して応答せざるをえない有様が示されている。(54)

ペイリン（A.S.R.S.）——鉄道従業員のストライキが生じ，移入労働者によってかれらの職が奪われたときには，移入された労働者によって炭鉱に運転されてくるトロッコに荷を積むことを炭鉱夫は拒否するかどうか。

ブルース（S.W.M.F.）——鉄道労働者がストライキに入ったとき，我々の組合員には規則によってわずか（週）5シリングしか払われないのか。

サクストン（A.S.R.S. 会長）——あなたの方の労働者と会社との間の契約はどうなっているのか。

ブルース（S.W.M.F）——その月の初日に（ストライキ）通告が与えられねばならない。通告なしの仕事停止は不法である。もしトロッコが炭鉱に運転されてきたら，働く義務が生じる。

ベル（A.S.R.S. 総書記）——もしタフ，リムニー，バリーの鉄道が止まったら，何人の炭鉱夫が職を失うか。

ブルース（S.W.M.F.）——少なくとも5万から7万の間である。

ブルースは，T.U.C. 議会委員会に代表を送り，次回の T.U.C. 大会でこの課題をとり上げさせるべきだと主張した。

炭鉱夫組合との会合の結果について，A.S.R.S. 本部副委員会の前記報告書には，つぎのように書かれている。「我々はまた南ウェールズ炭鉱夫連盟の代表とも5月25日当事務所で会った。よろこんでいうが，かれらは我々と極めて共感をもって会見したが，かれらが明確に指摘したことは，このことを組合員にかけるまではかれらは行動できないということであった。いかなる財政援助を我々は炭鉱夫に与える用意があるかと，かれらは我々に問うた。というのは，この問いに対する答えによって，南ウェールズの一つの鉄道で仕事が停止したときに，かれらが我々をどの程度支援することができるかについての組合評議会の態度が，かなりの程度決まるからである。(55)」

翌日の5月26日日曜日，A.S.R.S. 本部執行委員会が開かれ，タフ・ヴェイルのストライキ支援に対しては S.W.M.F. 評議会に「何らかの提供」がなされるべきである，と決定した。この会議でタフ・ヴェイルの問題は午後になって討議され，3時間以上つづいた。ホームズも同席していた

注 (53) *South Wales Daily News*, May 27, 1901.

(54) *Minutes of meeting between A.S.R.S. Executive Committee sub-committee and Miners' Council Committee*, May 25, 1901.（2頁のタイプ刷）(MSS. 127/AS/TV/1/4)

(55) *Report of Sub-committee re Taff Vale Dispute*, May 26, 1901, *op. cit.*, p. 13.

が，会議が終ったのは午後6時45分。いかなる情報も外部に与えないと言明された。[56]

S. W. M. F. 評議会が6月12日になって炭鉱夫組合員にタフ・ヴェイルのストライキ支援を提案すると，否定的意見が返ってきた。翌日 S. W. M. F. 総書記リチャーズはベル宛に，「我々の組合員は，ストライキが生じたばあいには，労働組合員がなすことを期待されている以上のことは何もしないだろう」と書き，S. W. M. F. 評議会はこのような組合員の要望を無視するわけにはいかないのだとして，支援を拒否したのである。[57] これを受けた A. S. R. S. 本部執行委員会は，S. W. M. F. 宛に，6月17日，「タフ・ヴェイル鉄道の現在のアジテーションは，いま中止しなければならない，と決定したことを通知する」[58]と書いた。このアジテーション中止の決定はつぎに述べるようにすでに6月10日に決定していたのだが，A. S. R. S. 本部が炭鉱夫組合からの支援拒否通告を，ストライキ中止の決定の正当性を裏付けるものとして内心歓迎したことはまちがいなかろう。

3　A. S. R. S. 本部による闘争中止の決定（1901年6月）

1901年6月10日，A. S. R. S. 本部執行委員会は，ついにタフ・ヴェイルの闘争の中止を決定する。執行委員グレイ Gray とジョージ George は，「本執行委員会は，タフ・ヴェイル問題に関する状況全体を検討した結果，一般的には組合にとって，特殊的にはタフ・ヴェイル労働者にとって，現在の争議をいまや中止することが最善であると確信する」[59]と提案した。これに対し2つの修正案が出された。1つはペイリン Palin とバンクロフト Bancroft によるもので，タフ・ヴェイルの「労働者に共感をもつが」，「より好機がくるまで」[60]争議を行なわないとするもので，事実上の中止であった。他の1つはジョーンズ Jones とラスティ Lusty による修正案で，「4つの鉄道での調停委員会の設置および T. V. R. の導入労働者の排除を強制すべくスト通告をだす意志を労働者の投票にかけること」[61]とする急進的内容をもつもので，タフ・ヴェイル労働者の意志を代弁したものといってよい。採決の結果は，原案が賛成7，反対4，保留2，第2回投票で原案賛成7，反対6で，僅小差で原案が通った。因みに，第1修正案の賛成は4，反対は7，保留は2，第2修正案の賛成は6，反対は7であった。[62] こうして僅小差で，タフ・ヴェイルの闘争の中止指令が本部から出され

注 (56) Letter from R. Bell to Thomas Richards, May 28, 1901.（2頁のタイプ刷）(MSS. 127/AS/TV/3/24/10); *South Wales Daily News*, May 27, 1901.「『サウス・ウェールズ・デイリー・ニュース』の記者は，議事は厳秘として扱われると決定されたと正式に通告された。」(*Railway Review*, June 7, 1901)

(57) Letter from Thomas Richards to R. Bell, June 13, 1901.（2葉の手稿）(MSS. 127/AS/TV/3/24/12)

(58) Letter from R. Bell to Thomas Richards, June 17, 1901.（1頁のタイプ刷）(MSS. 127/AS/TV/3/24/13)

(59) *The General Secretary's Report and Decisions of the Executive Committee*, June 10, 1901, (47), p. 25.

(60) *Ibid.*, (47), pp. 25-26.

(61) *Ibid.*, (47), p. 26.

(62) *Ibid.*, (47), p. 26.

ることになったのである。すでに述べたごとく，この決定がなされたのは炭鉱夫組合が支援拒否を決定した2日前のことである。

この6月10日の本部執行委員会におけるいまひとつ重要なことは，ホームズを6月13日に本部に召換して，「ホームズが行なったベルに対する非難を検討する」との提案がなされたことである。[63] この「非難」とは，5月12日にバーミンガムで開かれたタフ・ヴェイル支援の集会でのホームズの演説のことである。その日A.S.R.S.バーミンガム支部組合員は，バンドを先頭に市内をデモ行進し，タウン・ホールに着くと午後から集会をもった。ホールは人であふれていた。タフ・ヴェイルでの闘争を支援する集会が南ウェールズ以外の地域で開かれたという意味で，このバーミンガム集会は重要である。ベルは欠席したが，ホームズは，つぎのような長い演説を行なった。「過去1週間に事態は極めて重大な展開をみせた。会社は，いまや『道を知っている』120名を導入し，経営者は合同組合に挑戦してきた。もし組合がかれらと闘わなければ，かれらが組合と闘うだろう。組合と闘う断固たる意志をもってかれらは労働者を導入している。もしその挑戦をひき受けなければ，全労働者が解雇されるだろう。[64]」多くの地方新聞がこのバーミンガムでの集会を報道し，『レイルウェイ・レヴュー』も『バーミンガム・ポスト』から転載して報道した。[65] しかし，その中で『シッピング・ワールド』は，「先週バーミンガムでホームズ氏が行なった興奮した言明を拒絶するR.ベル氏の行動は，ホームズ氏が代表すると思われる地方鉄道労働者の一支部により迅速に承認された」とし，アバデーア支部が，バーミンガムでのホームズの演説は「全く誤っており，真実ではなく，南ウェールズの鉄道従業員に多大の損害と被害を与えるものである」と決議したことを報じている。[66] ホームズ演説をきっかけに表面化したベル対ホームズの対立に，6月10日のA.S.R.S.本部執行委員会は何らかの対処を迫られていたのである。

執行委員会ではベルに対する非難を検討するためにホームズを召換するという提案はさすがに通らず，代りにホームズをタフ・ヴェイルの争議について聞くために召換するという修正案が通った。[67] しかし提案は，ホームズ対ベルの対立が顕在化しはじめていることをうかがわせるに十分であるし，また他の提案の中でもホームズの「総書記との対立 friction」[68]という字句が用いられている。さらに，「ベルとホームズ両氏の間に生じていること」に結論を下すため，執行委員会に両者を召換するという決定もなされている。[69] つぎのことも全員一致で決議されている。「ベルとホームズ両氏

注 (63) *Ibid.*, (48), p. 26.

(64) 1901年5月13日付の *Birmingham Post; Leicester Post; Leicester Mercury; Manchester Couries; Manchester Guardian; Newcastle Journal; Western Press (Bristol); Bristol Mercury* の各紙，および，*Scotsman*, May 14; *Sussex Daily News*, May 15.

(65) *Railway Revew*, May 17, 1901.

(66) *Shipping World*, May 29, 1901. *Liverpool Post*, May 14 も，短いが同様の記事を載せている。

(67) *General Secretary's Report and Decisions of the Executive Committee*, June 10, 1901, *op. cit.*, (48), p. 26.

(68) *Ibid.*, (49), p. 26.

(69) *Ibid.*, (51), p. 27.

の間の争いに関して，二人の役員の間の対立は，共に相談せず，相互に信頼に欠けていることが大きな原因であり，両者とも等しく責任を負うべきであるとの見解を我々はもっている。我々組合員の利益は，かれらが友好的に共に働くことによって最もよく得られるということを2人は常に心しているべきであり，遂行さるべき政策に関し見解が相違するときは，相談の後，本委員会にかけられるべきである。さらに，我々は双方の役員を信頼していることを記し，今後かれらが協働するやり方に不満をもつ理由はなにもない」[70]と。あえて A. S. R. S. がかような決議を執行委員会でしたこと自体が，いかにベルとホームズの対立が深刻化しはじめていたかを示しているといえよう。

6月10日の A. S. R. S. 本部執行委員会の第3の重要な決議は，マーチ March によるベル批判に関するものである。後述するように，マーチは，1900年8月のタフ・ヴェイルのスト終結のさい，T. V. R. 側が締結条件に入っていたと主張する「スト破り」に対する自由裁量権の文言を，ベルが知っていながら偽ってスト終結にもっていき，ベルはタフ・ヴェイル労働者を「売った」'sold' とリムニー鉄道労働者の集会で主張した。本部執行委員会はこの総書記ベルに対する批判に関して，6月16日にビードン，マーチ，ベル，ホームズを，「ベル氏に対するマーチ氏の非難を徹底的に調査するため」召換することにした。シェパードという名の速記者をいれてその審議を記録することも決めた[71]。幸いなことに，その速記録がタイプ用紙58頁に残されており，それによって「ビーズリー書簡」をめぐる予期しなかった真相が明らかになる。

Ⅲ 「ビーズリー書簡」をめぐる A. S. R. S. 本部とタフ・ヴェイル闘争委員会
——A. マーチの尋問（1901年6月）

A. マーチによるベル批判に関する尋問は，1901年6月16日に行なわれた。A. S. R. S. 本部からは R. ベルを含む15名。タフ・ヴェイルからは A. マーチ A. March と G. ビードン G. Beadon, それにオルグ書記として J. ホームズが出席した。ビードンは，闘争委員会の議長で，スト締結条件に署名した人物である。尋問の論点はただひとつ——それは「ビーズリー書簡」（1900年8月30日付）の「スト破り」に対する自由裁量条項をめぐってであった。マーチは，ベルがスト終結以前にこの条項を知っていたにもかかわらず，闘争委員会に報告せず，その結果，労働者は「自由裁量条項」を知らずにストを終結した，とベルを批判したことが，そもそも事の起りであった。

尋問がはじまると，マーチはまず，「ベルが前回のストライキのとき労働者を売った sold」とするリムニー鉄道労働者の集会での発言を取り消し[72]，代ってベルは「特定の情報を抑えた」suppressed certain information」とするとした[73]。ベルは「買収されたことはない」が，「委員会を誘導し，そ

注（70） *Ibid.*, (52), p. 27.
（71） *Ibid.*, (55), (58), p. 28.
（72） *South Wales Daily News*, April 15, 1901.

の結果，委員会はベル氏の与えたことを真実であると受け取った[74]」と主張したのである。「ビーズリー書簡」をみて間もなく，T.V.R. 取締役たちに会ったときのことを，マーチはつぎのように証言する。「その労働者（「スト破り」）は会社を離れると我々は理解しているというと，社長は私の方を向いて，『何故だ？』とたずねた。私が『我々はベル氏にサー・ウィリアム・ルイスからとしてきかされた』と答えると，かれは『あなたは誤まって誘導されたのだ』といった。（かれがいうには）『あれ，すなわち書簡にあの条項を挿入することは，会社が守らねばならない唯一のことだ。もしそれがあなたたちに知らされていなくとも，我々はそれに責任はない[75]』」と。マーチは前年夏のタフ・ヴェイルのストライキ終結に関しては「なにか怪しい作為 some fishy work[76]」があると感じており，ベルだけでなくホームズもそれに絡んでいるとみた。マーチはいう。

「（スト）終結の夜，私はベル氏をひじょうに注意深く観察した。私は（闘争）委員会の一人としてベル氏が私に与えた声明を真摯に受けとった。当時，私はかれを全面的に信頼していた。しかしあの不幸な夜のこと，あの部屋のホームズ氏の行動を考えると……ホームズ氏は正常な人間というより異常な人間のようだった。かれは部屋に坐っていることができなかった。委員がその問題を討議しているとき戻ってきて，また歩いて出ていった。これら全てのことが想い出され，自問しつづけ，私はあの書簡には挿入された何かがあり，それは委員会に知らされていない，という結論に達した[77]。」

これに対し，ベルは，「私は『自由裁量』条項については，（翌日）土曜日午後『サウス・ウェールズ・エコー』紙上でビーズリーからの書簡を見る以前は全く何も知らない。そのあと私はサー．W.T.ルイスにそれに注意を促す電報を打ったが，返信を受ける代わりに，サー・ルイスからの列車による書簡を受け取った[78]」と証言し，ストライキ終結まで「ビーズリー書簡」を知らなかったという，かれのそれまでの見解を繰り返した。これは，A.S.R.S. が1901年3月に公式に表明した前記の見解である。この立場の故にこそ，T.V.R. 側が「スト破り」排除についてスト締結条件を守っていない故にこそ，1900年9月以来延々タフ・ヴェイル労働者が闘いを続けてきたのである。その立場は，労働組合の要求の正当性の根拠であったのだが，つづく尋問のなかで真相が明らかにされると，この根拠は危うくなる。以下，その尋問の模様に耳を傾けてみよう。

C.W. ジョージ（A.S.R.S. 本部執行委員）――（ストライキ）締結の最後の夜に，マーチ氏はコルボーン・ホテルにいたかをききたい。

マーチ――いました。

注（73） *Executive Committee inquiry into allegations by A. March,* June 16, 1901.（速記および58頁のタイプ刷）（MSS. 127/AS/TV/1/5/1-5), p. 4.

（74） *Ibid.,* p. 4.

（75） *Ibid.,* p. 5.

（76） *Ibid.,* p. 5.

（77） *Ibid.,* p. 6.

（78） *Ibid.,* p. 7.

ジョージ――サー．W.T.ルイスがその（ビーズリーからの）書簡を読んだとき，あなたはいたか。

マーチ――いいえ，ホームズ氏だけがいました。

ジョージ――ホームズ氏。締結の日に，あなたとベル氏はサー・ルイスと何回会見したのか。

ホームズ――私が記憶しているかぎりでは，2回。ベル氏は3回だと思う。

ジョージ――この3回の会見の中のいずれかで，報告にあるその書簡と同じような文書が，あなたとベル氏とサー・ルイスの間で討議されたか。

ホームズ――はい。

ジョージ――あなたとベル氏とサー・ルイスが討議したとき，その書簡は「自由裁量」条項を含んでいたか。

ホームズ――はい。

ジョージ――あなたはその「自由裁量」条項に異議を申し立てたか。

ホームズ――はい。ベルがそうしました。

ジョージ――その時サー・ルイスは，ベル氏とあなたの要求により，その書簡をビーズリー氏へ返して，その条項を削除するよう求めるといったか。

ホームズ――はい。サー・ルイスはその書簡を持ち帰り，書簡からその条項を削除させるよう求められた。かれはただちに馬車を呼び，我々は1時間近く待った。かれは戻ってくると，ビーズリー氏が「自由裁量」の用語を削除するのを拒否したといった。それからベル氏はそれをあるがまま受け入れる決心をし，（闘争）委員会にそれを提出した。

ジョージ――ホームズ氏について確認したいのだが。サー・ルイスからの返答，つまりビーズリーのところから戻ってきたときに，ホームズ氏はいたのかどうかをききたい。ベル氏がその返答を受け容れたとき，ホームズ氏はいたのか。それに反対したのか。

ホームズ――私は「自由裁量」の用語に反対したし，ベル氏もそうした。かれ（ルイス）は「その（「自由裁量」の）意味するところは何か」ときかれて，こう答えた。「私はその意味をこう理解する。私はヴァスル氏（T.V.R. 会長）から保証されているのだが，1カ月後に残留している（「スト破り」の）労働者の合計は，3名か4名か5名になるだろう。私はその用語の意味を日常的意味で理解しており，1カ月であってそれ以上ではない。」

ジョージ――サー・ルイスがビーズリー氏のところへその削除のためにいき，そしてベル氏がそれを労働者の討議にかけるべく受け入れたとき，ホームズ氏はそれを労働者に提示することに反対したのか。

サクストン会長――あなたのいうのは，ホームズ氏が労働者に知らせる声明に反対したか，という意味か。

ジョージ――いいえ，ベル氏とホームズ氏は「自由裁量」条項に反対した。かれらは，サー・ルイスがその条項を削除させるべくビーズリー氏のところへもって帰ったといっている。サー・ルイスはかれの事務所のかれらのところへ書簡をもって帰ってきて，ベルとホームズ両氏に会っている。

ルイスはかれらにビーズリー氏は「自由裁量」条項を取り除かないだろうといったにちがいない。私がホームズ氏から知りたいのは，それからホームズ氏がしたことである。つまり，ホームズ氏はベル氏がそれを労働者に提示するといったのをきいたといっていた。ホームズ氏は，その条項を削除できないと知って，二度目のさいにそれを労働者に提示することに反対したのか。

ホームズ――私はそれに終始同意しなかった。しかし，ベル氏に絶対的責任がある。私は「自由裁量」条項に異議申し立てをした。それに同意しようとしなかった。それをコントロールしようにもできなかった。(79)

以上の尋問のやりとりから，ベルもホームズも「ビーズリー書簡」の「自由裁量条項」を事前に知っており，ルイスを介してビーズリーに削除を求めることまで行なっていることが明らかである。ベルが，そして A.S.R.S. 執行委員会が主張してきた，スト締結翌日に書簡を受けとるまで自由裁量条項を知らなかったという主張は，虚構であったことが判明する。これは，タフ・ヴェイル労働者が1900年9月以降主張してきた T.V.R. の締結条件不履行という根拠が崩壊することでもある。そして，それ以降8・9カ月にわたるタフ・ヴェイル労働者の運動も正当性を失うことにもなる。

ベルもホームズも「自由裁量条項」を知っていたのに対し，タフ・ヴェイル闘争委員会議長ビードンは知らなかった，というのが事実のようである。ビードンは1900年10月に直接 T.V.R. 社長と会見したときにこの条項のことを知らされて驚いている。

ジョージ――あなたは締結以後，ビーズリー氏と会見したことがあるか。

ビードン――はい。

ジョージ――「自由裁量」の問題が会見のとき生じたかどうか，また，労働者に対する原文はそれを含んでいないとあなたはビーズリー氏に指摘したかどうか，そして何が起ったかを我々に話して欲しい。ビーズリー氏との会見で何が起ったかを我々に話しなさい。

ビードン――私は10月にビーズリー氏の事務所に呼ばれた。日付は分らない。日曜だった。私が呼ばれたのは，スト破りに対する労働者の活動について叱りつけるためだった。かれは私に責任があるとした。かれは私に，「何故あなたはあなたの労働者たち――かつてストライキをやった労働者たち――がスト破りに干渉するのを許しているのか」といった。私はかれらがそうするのを許していない，といった。(ビーズリーは次のようにいった)「何故，これらの労働者(=「スト破り」)はあなたたちと同じ地位を占めるべきではないのか。」「我々はかれらは1カ月以内にでていくと理解した。」「『我々』とは誰のことか。」「全ての労働者だ。」「あなたは状況を理解できていない。」「私は理解していた。」「しかし，私はかれらをひき留めておく権限をもっている。『自由裁量』という用語が書簡の中にあった。」これがビーズリー氏が私にいった言葉である。(ビーズリー)「これが読めるか。」(ビードン)「はい。読める。」「あなたが読んだことを理解できるか。」「そう努めよう。」(ビーズリー)

注 (79) *Ibid.*, pp. 16-18.

「あなたは締結のとき，『自由裁量』という用語が入ったこれを読まなかったのか。」（ビードン）「かれらは出ていくと我々は理解させられた。」「誰によって？」「サー．W.T.ルイスだ――サー．W.T.ルイスからだとベル氏が我々に話した。」「しかし私は労働者に対する『自由裁量』がある。サー・ウィリアムは私のところに戻ってきて，それを取り除くよう求めた。私は拒否した――それは私の唯一の留保条項である。」「それは我々が理解したものと違った。労働者はそれを理解しなかった。さもなくば，かれらは仕事に戻らなかっただろう。」「それはあの男ベルがあなたたちにいったやり方だ。『自由裁量』という用語は，書簡の中にあった。私はそれを削除しようとしなかった。それは私の唯一の留保条項だ。」

ジョージ――これは10月だったということか。

ビートン――はい。

ジョージ――あなたがベル氏に（1901年1月11日付ベルからの書簡に対する返信として）書いたとき，何故あなたはベル氏にそのような情報を与えなかったのか，我々にいうことができるか。

ビードン――はい，できます。ベル氏は私に，私が「自由裁量」という用語について何らかの記憶があるかどうか――私が「自由裁量」についてあの夜何らかの言明をきいたかどうかを知るために手紙を書いた。私はきいたことがなかった。ベル氏が運動に責任を負うていた。かれは実際に書記だった。かれが責任を負うていたのだ。会社と闘っていたこの組合の一組合員として，その書簡をベル氏から受けとったとき，私は何もきいていなかった。従って私は何も知らないと返答した。しかし，ビーズリー氏とサー・ルイスから私はきいていたが，それは外部でのことであり，かれらはきいたといえるような人々には入らない。事は私の属している組合と運動に責任ある書記とに影響を与えるものだったから，私はそれに従って答えた。私は噂にもとづいて答えたくなかった。(80)

1901年1月11日付ベルからビードン宛書簡に対し，ビードンが自由裁量条項について何も書かなかったことが，尋問の後半でベルによってビードンの主張の矛盾として突かれることになる。

ここで誰しもが疑問に思うのは，ベルは「自由裁量条項」が入った「ビーズリー書簡」の内容を，どのように闘争委員会に伝え，受諾させたのだろうか，という点であろう。

ジョージ――誰が議長だったのか。

ビードン――私です。

ジョージ――かれ（ベル）がその詳細をどのように労働者に伝えたか，いうことができるか。それは書簡だったのか，それともノートからか。

ビードン――委員会は開かれていた。私はベル氏と並んでいなかった。ベル氏はソファーの端に座っており，ホームズ氏はもう一方の端に座り，委員たちは円形に座っていた。ベル氏が，「紳士諸君，私はここに最終締結書をもっている」といい，あれ（レター・サイズの一枚の紙を示しながら）

注（80） *Ibid.*, pp. 19-21.

より長い書簡をとり出した。タイプで打たれた書簡で，その書簡からかれは我々に決定を伝えた。そこに座って伝えた。しかも，もちろん生涯にわたって私はその書簡を（見せるよう）要求しなかったことを後悔するだろう。しかし，私はベル氏のような紳士から書簡を要求しようとしなかったのである。

ジョージ――それが書簡であったかどうか分かる程あなたは近くにいたのか。

ビードン――はい。それは書簡だった。

ジョージ――それが誰に宛てられたとか署名がわかる程あなたは近くにはいなかったのか。

ビードン――近くにはいなかった。(81)

闘争委員会でベルは確かに「書簡」をもっていた。口頭で読みあげただけで回覧はしなかったが，その「書簡」には自由裁量条項が書きこまれていたはずであると推測しがちである。しかし，そうではない。では，いかなるトリックが使われたのか。

ホームズ――ビーズリー氏が「自由裁量」の用語の削除を拒否したとき，ベル氏が委員会にかけるべくその書簡を受け入れるや否や，サー．W．ルイスはただちにかれの書記を呼びコピーをつくらせた。我々はそれができるまで待っていた。サー．W．ルイスが1つを読み，ベル氏が他をもった。ベル氏はそれをもって外に出ていき，私はそれがベル氏が委員会で読んだものと考えている。

モス（A.S.R.S. 本部執行委員）（ビードンに向かって）――あなたはストライキ委員会議長だった。深夜サー．W．ルイスのところへ行く前に，「あなたの委員会は「自由裁量」条項のある書簡について討議したか。

ビードン――私の委員会はその書簡を討議したが，「自由裁量」条項がその中にあると知らなかった。

サクストン会長――ホームズ氏は3回目（のルイスとの会見のさい）にベル氏と一緒にいなかったと私は理解しているが，ビードン氏はいたのか。

ホームズ――はい。

会長――それはサー．W．ルイスがビーズリー氏と会った後のことか。

ホームズ――はい。

会長（ビードンに向かって）――あなたとベル氏がいるところで，その特別のときに「自由裁量」条項が現われた，サー．W．ルイスが読んだその書簡を，あなたはそこにいて見たのか。

ビードン――いいえ。それはその後のことである。我々はサー・ウィリアムのところへ戻っていった。ベルは，「さて，サー・ウィリアムさん，かれらはこの条件を受け入れた」といった。それからかれは，「やるべきことの全ては，ビーズリーに返信を書くことだ」といった。それからかれは私の方を向いて，「これは極めて注意深く用語を選んだ書簡でなければならないだろう。我々は交された様々な書簡を考慮にいれねばならないだろう。たぶん，私がやる方があなたにとってよい

注（81） *Ibid.*, p. 24.

だろう」といった。私はかれに感謝し，かれがそれを書いた。かれがビーズリー氏への返信を書いたのだ。午前1時近くだった。かれは「さて，この書簡は朝ロバーツ氏にタイプしてもらおう。あなたは10時頃来なさい。そうすればそれを受け取ることができる」といった。ビーズリー氏は公認の執行委員には何ひとつ連絡しないで，労働者の賛意を得ようとした。翌朝我々がいったとき，サー・ウィリアムは出かけていた。かれはタフの会社事務所にいっていたが，かれの私的秘書ロバーツ氏が3通のコピーをもっていた。私はサー・ウィリアムが前夜書いた文書を注意深く読んだ。それは完全に正しく，私はそれに署名した。宛先名の入った封筒があった。1通はビーズリー氏宛に入れ，ベル氏が他の1通をもち，私が3通目をもった。(82)

ここまでくれば，謎は解ける。つまり，T.V.R. のビーズリーが自由裁量条項を削除しないときいたベルは，その削除なしに労働者が受諾しストライキを終結する策を考え，ルイスと共謀して自由裁量条項の入らないものを秘書にタイプさせたのである。ホームズも自由裁量条項が削除されないことは承知していたが，そのまま闘争委員会にベルが読み上げるかたちで報告されたので（もちろんこの時は自由裁量条項には全く触れないで），ひどく動揺した。闘争委員会議長ビードンは，委員会でベルの口頭の説明をきき，書簡を回覧する要請もしないまま，つまり自由裁量条項については全く知らないまま，労働組合員に受諾するよう説得した。最後にベル宛のビードンの締結条件受け入れの署名が必要になるのだが，これは30日深夜ベルが闘争委員会は条件を受諾した旨書いたビーズリー宛の文章が巧妙に書かれていたため，翌日ビードンがその写しをみたときにはその条項を含まれていないものと理解して署名してしまった。これが真相であろう。南ウェールズの闘争委員会とベルと，その両者の間にあって動揺するホームズという三層構造がここでも浮び上ってくる。

改めていうまでもなく，以上の推論が正しいとすると，1900年9月以降のタフ・ヴェイルの闘争の正当性は失われる。ベルの政治的立場も崩れる。そこで尋問の最終で，ベルは猛烈に反撃を開始する。論点をズラし，ストライキ締結時には「ビーズリー書簡」をともかく現場で持っていたかどうかを論点としたのである。その直前にビーズリーに自由裁量条項の削除を求めたことなどには全く触れず，その点については沈黙を守りながら，である。

ベル――私がいいつづけてきたことは，最終締結が成立したコルボーン・ホテルの会合という重要な場で，この書簡をもっていなかったということである。ホームズ氏はサー．W.T.ルイスがこの書簡のタイプ書きのコピーをかれの秘書につくらせるよう命じ，ひとつのコピーを私に送ったと述べた。私はそのタイプ書きの書簡のコピーをもっており，ここに提示してあるが，しかし，それはスト破りの保有に関する条項には言及していない。……私がそれを委員会で回覧しなかったことが強調されている。私はその1通の文書を回覧したとはいえないが，いつも文書は受けた順に綴じられ，それをみたい議長や委員には自由にみられるようになっている。それからビードン氏は，私と一緒にサー．W.T.ルイスのところへ最終の会見に行ったとき，かれは私が書簡を（ルイスに）

注（82） *Ibid.*, pp. 28-29.

返すのを見なかったと再び述べている。それは全く正しい。私は返す書簡をもっていなかった。かれが私に送ったコピーは所持していた。他の関係書簡は私はもっていなかった。……

誤りであろうとなかろうと，私は再び極めて積極的に繰り返すが，ビーズリー氏からサー．W．T．ルイス宛8月30日付書簡のコピーを，土曜日以前には私はもっていなかったのである。これが集約された論点である。……もし私がその書簡をもっていたならば，私がそのコピーを翌日送ってもらうよう請求する必要がどうしてあったのだろうか。「自由裁量」条項が挿入されている事実を知っていたならば，翌日午後『サウス・ウェールズ・エコー』紙へのビーズリー氏の書簡でかれの解釈を知ってひどく当惑しただろうか。これが私のいいたい全てだ。(83)

さらにベルは，ビードンの「矛盾」を突いている。かれは10月にビーズリーに呼ばれ，「自由裁量」条項が入っていることを知ったという一方で，1月11日付のベルからの問い合わせに対し，何も知らないと答えている。それ故，ベルは皮肉にこういう。「マーチ氏がリムニー従業員の会合に参加するまでは，労働者を誤まって誘導したとか『売った』ということはなかったというのは奇妙にみえる。(84)」急にリムニー鉄道労働者の集会で，マーチがビーズリーは労働者を「売った」として捏造しはじめたというのである。

ベルは最後にいう。「争議の実行に責任ある組織の総書記として，我々の組合員の誰かを売り渡したと宣告される人は，その地位にふさわしくない。私は慈悲を望まない——私はそれを求めない。私がこのばあいこれらの労働者を故意に誘導したのかどうかを判断するよう，私はあなたがたに求める。私が8月30日にその文書をもっていたかどうか判断するよう私はあなたがたに求める。そして，もし私がその文書をもっていたとして，私がそれを労働者の集会で読んだかどうか，そして何故私がしなかったかという動機を判断することも。(85)」

以上の尋問の末，本部執行委員会はつぎのような決議をした。

「　　決　議

A．アーチ氏のベル氏に対してなした，4月18日の南ウェールズ新聞に報道された告発について注意深くかつ徹底的調査した結果，ビーズリー氏からの8月30日付書簡について誤解があったことを我々は見出し，また，8月30日のストライキ委員会の手に渡っているべき情報をベル氏が抑えたということを我々は見出すことができない。それ故，我々は3月会議での我々の決定を変更する理由がない」

「我々に提示された証拠により，マーチ氏は『ベル氏は労働者を売った』という言明を撤回すべきであると我々は考える。何故ならば，かれはかれの言明が意味する汚名を認識しなかったと我々は考えるからである。(86)」

注 (83) *Ibid.*, pp. 54-5.
(84) *Ibid.*, p. 57.
(85) *Ibid.*, p. 57.
(86) *Ibid.*, p. 58.

この決議によって，A.S.R.S. 本部執行委員会がR．ベルの主張を全面的に取り入れたことは明らかであろう。執行委員会は，その日のうちにこの決定を正式に承認した。[87] かくして「ビーズリー書簡」をめぐる真相は，A.S.R.S. 年次大会は勿論のこと，執行委員会議事録にも記述されることなく，闇に葬られることになったのである。（続）

（経済学部教授）

注（87） *Minutes of Special Meeting,* June 16, 1901, in *General Secretary's Report and Decisions of the Executive Committee,* June 10, 1901, *op. cit.,* p. 79.